

---

# また明日を

玉城 水雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

また明日を

### 【Nコード】

N 6 2 6 7 M

### 【作者名】

玉城 水雲

### 【あらすじ】

死にたいと思っていた澪。

やっと幸せを掴んだと思った瞬間

自らを死神と名乗る少年に死を告げられて……

## 0（前書き）

はじめまして。

クズキ 玉城 モスク 水雲と申します。

ゆっくりな更新にはなりますが、お付き合いしてくださいと  
嬉しいです。

また来てしまった。

ベットの白石 澪（シライシ ミオ）は自嘲する。

来るに決まってるじゃない。

だって私は臆病だから、自分から死ぬなんてできない。

寝ている間になぜか、家に飛行機が突っ込んできたり、火事で私ごと全て灰になってたり

なんて都合の良いすぎる事を考えて寝たって、そんな事が起きるわけはなく

また、朝を迎えてしまう。

もう、何年そんな事を考えているだろう。

澪は今、高校3年生だ。

だが、別に受験のストレスでこんな事を考えているわけではない。

すでに、有名私立大学へのエスカレーター進学が決まっており、むしろ受験とは無縁なのだ。

そんな彼女が悩んでいる理由、それは家でのトラブルだ。

いや、トラブルというわけでもないのだろう。

直接的な原因は姉の病気、である。

姉は、なんだか難しくて覚えてはいないが、難病を先天的に抱えており

丁度、澪が受験校を決めた頃にその難病が悪化してしまったのだ。

澪の家、つまりは白石家は、由緒正しいのかは不明だが、それなり

に権力と財力を  
抱えている旧家なのである。

その白石家を継ぐはずだった漣の姉、蒼（アオ）が立ち上がること  
さえできぬ身体になってしまい  
そうなれば、次は漣が継ぐことになる。

姉が倒れて、入院することになってから、すぐに漣は父に呼び出され  
受験する高校を勝手に変えたことを告げられたのだ。  
それは姉が通っている有名私立高校だった。

## 0 (後書き)

### 後書き

見てくださり、ありがとうございました。  
誤字・脱字を見つけたら、こっそりとお知らせください。

また来てしまったのなら、今日も生きなくてはいけない。

と漑は諦めて、学校へ行くことにする。

とは言っても、車に乗ってボーっとしているうちに学校へは着いてしまう。

「行つてらっしゃいませ。」

と運転手がドアを開けてお辞儀をする。

こんなこと、漑が中学生の時まで……姉が倒れるまではありえなかった。

これは姉だけの特権だと、幼い頃から思っていた。

姉の特権はいろいろあった。

姉が倒れてからは、その姉だけの特権が漑にも与えられたが、一つだけ、やっぱり姉だけの特権がある。

漑が最も欲した特権……。

それは、両親の笑顔……。

小さな頃から、

いや、漑の記憶がある中で、両親が漑に笑いかけた事は一度もない。

家の柱の陰から、何度か、笑顔だけは見たことがある。

しかし、それは余計に漣を傷つけた。

両親が笑わない人間だったら、そういう人間なんだと吹っ切れる事ができる。

けれど、両親は姉には…漣以外には笑うことができる人間なんだと知っていた…。

じゃあ、何故両親は自分に向けては笑わないのだろう。

きっと…私のせいなんだと、漣は思っていたし  
今も変わらず、そう思い続けている。

だって、現に今だって両親は私には笑わない。

姉ばかりを見ている…………。

そこで、ふっと辺りが騒がしくなったと思い

漣は自分が教室に着いたのだと知った。

女のキンキンした甲高い声は苦手だ。

ましてや、こんなネガティブな事を考えてしまった朝に聞くこの声は  
きつすぎる。

始業まで、結構な時間がある事にうんざりして漣は鞆から

iPod も取り出し、外の騒がしさを少しでも遮断させようとした。

だから女子高は嫌だったのに。

音楽さえかき消す様な大声で、クラスメイトの何人かが  
合コンの話をしている。



まったく、暇なやつらと自分だって暇なのに何故か澪は思ってしまう。

フン、と馬鹿にしたように澪がその生徒たちを見つめているとその生徒たちが澪によってきた。

さつき馬鹿にしたのが伝わってしまったのか、と澪が内心身構えていたが

そういうわけではないようだった。

「ねえ、白石さんも、エスカレーターで合格確定者だったわよね。」  
「…そうだけど。何？」

澪のその冷たい切り返しに何人かは怯む、がそのグループのリーダーらしき子は  
気にせずに話をした。

「じゃあ、暇よね。」

「…だから、何？」

「私たち、合コンするんだけどね、一人足りないのよ。」

「…私に出るって事？」

「そう。ダメかしら。」

「そうね、嫌だわ。」

そんなの嫌に決まっているだろう。

というより、私がこういうの絶対に参加しないことを彼女らは解っているだろうに…。

合コンどころか、遊ぶことさえ断る澪はクラスでも浮いていた。そんな澪に何故頼むのだろう。

「ねえ、お願いっ！他の子たちは、受験で大変だし…」

「そうそう、白石さんにしか頼めないのよ。」

「別に、無理に話したりしないで、端っこに居てくれればいいから！」

ああ、なるほど。

やっと彼女らの意図を漑は理解した。

つまり、漑をダシにするつもりなのだろう。

ブスの隣に居れば、自分が少しでも可愛くみえる

最悪、この子よりはましだ、と思わせるつもりなのだろう。

「…いいわ。行つてあげる。」

そう、漑が言つた瞬間、彼女たちはキャー！

と歓声をあげた。

「ありがとう、白石さん！白石さん、美人だから相手のレベルもあがるわー！」

などと、漑からしたら、お世辞にもなつちやいないことを彼女らが口ぐちにいつていると

始業のチャイムが鳴った。

「じゃあ、場所とかは後で連絡するわー！」

慌てて自分の席に戻りながら、グループのリーダー格が言った。  
座った席から推測すると、リーダー格は織田彩香（オダサヤカ）という名前の子だった。

三年間、クラス替えは文理分けの時の一度しかなかったが、  
遷は未だにクラスの人間の顔と名前が一致しない。

ときには、こんな顔の人間がいたっけ  
なんてなるときもある。

要するに、クラスに興味はないし  
むしろ嫌いといったほうが良い。

面倒くさい事になったな、と思いながら  
遷はiPodをしまい先生を待った。

## 1 (後書き)

ありがとうございましたw

「わー、白石さん来てくれたんだね。」

当たり前だ。

と、いうより、来なくても良かったのだろうか。

待ち合わせ場所に指定された公園に居た漣への第一声は

「おはよう。」でもなく

「来てくれたんだね。」

だった。

ずいぶんと私は信用されていないらしい。

キヨロキヨロと辺りを覗うが、漣と

「…綾子とさつきも、もうすぐに来るって。」

アヤコとサツキ

と言われたって、全くもって、誰だか解らない。

まあ、この間話していた子たちだろうから、あの二人のうちどちらかがアヤコでもう一方がサツキなのだろう。

「ごつめーん！遅れた？」

「連れてきたよー！」

どっちがどつちなんだろう、考え事にふけていたいた漣は

急に騒がしくなった事で、ふと顔をあげた。  
すると、いつの間に来たのか4人の男の子に囲まれていた  
髪の長い方の女の子と目が合った。

「あ、白石さんもおはよー！」

多分、こっちの髪の長い方がアヤコだろう。  
確か……。

「この白石さんが、噂の美女だよー！」

冗談もほどほどにしてほしい。

呆れたようにそう思った漣だが、漣が思っているほど  
漣はブスではない。

いつもふてくされたような表情をしているけれど、  
笑顔になれば、そこそこに美人だ。

男の子たちが自分を見つめている事に、気付きた漣はフイっと顔を  
そらす。

「「あ……」」

そらした視線が、誰かと合った。  
さつき漣を見つめていた男の子たちとは別の男の子だ。

「ああ！小山あ、てめー！なんでそっちに居るんだよー！」  
「そーだそーだ、美人を一人占めしてんじゃねーぞ！」

漣と目が合った子は『小山』というらしい。

ヤジを飛ばしてきたやつらと違い、その小山は、どうしてもよそよそくに漣の隣に座っていた。

「だってさあ、俺は来たくて来たんじゃないもん。」

ケツと言わんばかりのその態度は、漣と良く似ていた。

この人も、私と同じで連れてこられたんだ。と思うと、なぜか親近感がわく。

チラリと横顔を盗み見ようとすると…

「わっ！」

また目が合った。

慌てて漣がめをそらすと小山が話しかけてきた。

「ねえ、あんた…白石だったっけ？」

「……はい。」

「白石も、連れてこられたんだろ？」

「………そうだと思うわ。」

一瞬、小山が静かになった。

そして……ブフッ！と吹き出すような音がした。

ギョッっとして漣が小山の方を見れば、小山は腹を抱えて笑っている。

「あっははは！おっかしー！『そうだと思う』って、なんだよ。」

しまいには、ヒーヒー言いだした。

なにかマズイ事をしただろうか、と不安になっていた澁は少しふてくされた様にその様子を見つめていた。

「そんなに、おかしかったかしら？」

「あつはは！なんかすつげえツボった。」

『それは、良かったわね。』　そう言おうとしたが

「みんなー！行こー」

という、声にかき消された。

なぜかは解らないし、解りたくもないがかなり盛り上がっているみんなを見て、自然にため息が漏れる。

あんなのとこれからカラオケに行ったら鼓膜と神経がどうにかなってしまう。

「じゃあ、行こうぜ。」

そう言ったわりに、ダリイなどと呟きながら小山が立つ。

つられた様に澁も立ち上がり異常に盛り上がっている集団の後ろを歩きだす。



### 3（前書き）

実はこの物語はサイドストーリーでした。

でも、メインストーリーはアレなので……と思ってこっちをメインにしてみました。

そんなわけで、メインの方もuするので、アレが大丈夫な方は、是非w

あの合コンの日から  
一週間が経った。

あの中で、サツキが誰かと付き合い始めたらしい。  
なんでは、知らないが漣にもそのニュースは知らされた。

漣自身は何も変わらず、毎日を過ごしているつもりだった。  
が、それではこの物語は続かない。

一週間が経ったこの日、漣の人生は変わったのかもしれない。  
普段は絶対に鳴ることのない、『飾り』の域にまで達している漣の  
携帯に着信があったのだ。  
メールの差出人は

小山 隆明（コヤマタカアキ）

そう、あの合コンで出会った男だった。  
アドレスを教えたはずはなかったが…  
と漣がメールを見ると…そこには  
まあ、要訳すれば、『また会いたい。』

というような事が書いてあった。

正直、小山の存在すら忘れかけていた漣に、会う気はサラサラなかった。

面倒くさいので、返信すらせずにベッドに放置された携帯が鳴ったのは

深夜といってもいいくらいの時間だった。

ぴりりん

と携帯が間抜けな音をたて、漣に電話が来たことを伝えた。

いったい何事かと通話ボタンを押した瞬間キーンと、耳がおかしくなりそうなほどに

高い、母親の興奮したような声が響いた。

『みおお！蒼が…蒼が…』

死んだ、と伝えようとしているのか

と、一瞬嫌な事が頭を過ぎったが、次に聞こえてきた母親の言葉は全然違うものだった。

『蒼の病気の対効薬が、やっとできたんですってえ！それで、明日さっそく手術するから母さんも父さんも蒼が退院するまで、家には帰らないから、よろしくね。』

一方的に伝えたら、ブチッと通話は切れ、そのあとには無機質なプープーという音だけがした。

正直、漣にはその出来事が嬉しいのか、解らなかった。

確かに、嬉しい。

なんだかんだ言ったって、姉は姉。  
それは嬉しい。

けど、姉がまた帰ってきたら…私は…？

また公立大学を受験するのかしら。

それも、それなりに嬉しい。

だけど、それじゃあ、本当に『姉の代わり』ではないか。

嬉しい。でも……

でも………？

グルグルと取り留めのない嫌な事ばかりが頭をかすめているうちに  
漣はいつのまにか、眠っていた。

### 3 (後書き)

ありがとうございました。

「漣おー元気にしてた？会わないうちに大きくなったんじゃない？」

姉が帰ってきた。

まるで田舎の祖母たちのような、その言葉に漣は吹き出す。

「蒼ちゃん…おばあちゃんみたいな挨拶、やめてよ。だいたい、成長期終わってるし。」

「だってえ、漣は私に会いに来てくれなかったじゃない。寂しかったのよ。」

漣が笑って言うと、蒼はもう大学生なのに、まるで幼稚園くらいの子の様に

頬を膨らませて言い返した。

何気なく、言ったその言葉が漣を苦しめているとも、知らずに。

漣だって、姉の見舞いにくらい行きたかった。

しかし、いつだって姉の傍には両親のどちらかは絶対にいて

姉と楽しそうに話をしていて、その楽しそうな空気を壊す事なんて漣には出来なかった。

何度も見舞いに行こうとして、結局行けなかった  
なんて、正直に言えるわけもなく、しかたなく

「だって、私だって高校生よ？けっこう忙しかったの。ごめんね。」

こう、嘘をついた。

忙しいなんて嘘に決まってる。

部活も、委員会もやっておらず、友達もいない。

でも、蒼はそれを知らない。

「そっかあ、そうよね。今日も忙しい？」

「…うん。今日は大丈夫。」

「そっかあ、じゃあ、片づけ手伝ってくれる？」

「いいよ。ちょっと、待ってて！」

はい、という姉の声を背中ごしに聞きながら、澪は部屋へ向かった。

別に、部屋に帰ってすることもないが、とりあえず、心の整理がしたかった。

とりあず、元気そうな姉の姿にほっとした。

でも、どう接すればいいのか、解らなかった。

姉のせいで、振り回されているわけじゃない。

だけど、どこか蒼のせいだと思ってしまう自分もいるのだ……。

ドロドロとした思いを断ち切ろうと軽く首を振ると、着信ランプが点滅している

携帯が目に入った。

なんだろう、と携帯を手に取り確認する。

…差出人不明のメールが一通きていた。

『最初に会ったところで待ってるから。これないならメールしてよ。』

その内容で誰だか解った。

小山だ。

すっかり忘れていたが、約束というか…指定されているひ日はちょうど今日だった。

行くとも言っていないのに、ずいぶんと自分勝手だな。しょうがないから、断りのメールをいれようとしたが、

「みおー！」

と、自分と呼ぶ声がしたのでそのままにしまった。

「もー、遅いよ！」

「ごめんごめん。」

「もしかして、カレシからのメールでもあったの？」

「…違うよ。」

何かを期待するように姉が放った一言を洩は軽くあしらう。見当違いにもほどがある。

「なーんだ。」

心底つまらなそうに蒼は言った。

「蒼ちゃんは、いるの？」

そっけなさすぎたか、と慌てて取り繕う様に洩は訊いた。



「えっ……わ、私はー……」

「へえ、いるんだ。」

「みつ、澪！……そ、そんなんじゃ……」

「ねえ、彼氏どんな人なの？」

恋をする女の子は可愛くなる。

とどこかで聞いたことがあるが、その通りだな。

と漑は恥じらっている姉を見つめながらふと思った。

そんな根拠のない事を…

と聞き流していたけど……

「う…漑…聞きたいの？」

恋する乙女な蒼は頬を赤く染めながらオズオズと

…できれば、『聞かなくてもいい』という返事が欲しいな…

と思いながら聞き返すが、そんな聞き方をされれば

「うん。すつごく聞きたい！」

と返ってくるに決まってる。

「ええ…だって、まだ彼氏じゃないし…」

「え？そうなんだ…。じゃあ、片思い？」

意外な蒼の言葉。

その恥ずかしがりようから、彼氏がいるんだと思っていたが

彼氏ではないらしい。

「うーん…。ちゃんと想いは伝えたし、多分付き合えるとは思ってるんだけどね…。どうかな」

蒼はうふふ、とみている人を和ませる様なほほ笑みで結構、意味深な台詞を言った。

「ふーん。でも蒼ちゃんなら、平気だよ。」

そんな言葉をあまり深くはとらえずに…

というより、あまりそういった事の知識がないので解らないまま逝った漣の言葉に

「ありがと、漣。」

「で、どんな人なの？格好いい？」

「ええー！やつと話題逸らせたと思ったのに！」

「ほら、言わないと片づけが終わらないよー」

「漣は、会わないうちに意地悪に育っちゃったんだね…。解ったよ。言うよー！」

はあ、半ばあきらめたようなため息を一つついて蒼は語りだした。

「んつと…そりゃあ、格好良いよ！なんかクールっぽくて、大人な感じかなあ。うん、背も高くて…」

最初こそしつぶといった感じだったのに、話していくうちにノリノリになって蒼は

話し続ける。

そして最後は

「年下なんだけどね。」

としめた。

「年下なんだー。いくつ？」

自分で聞きたい聞きたいといっていた漣だったが、だんだんノリノリになっていく姉の

惚気ている以外の何物でもない様なデレデレぶりに飽きてきて  
結局、最後の『年下』しか聞いていなかった。

「…確か、漣とおんなじ学年だったはずだよ？男子校なんだって！」

「蒼ちゃん、本当にその人の事、好きなんだね。」

そのデレデレぶりはダルイな、と思う反面、いいなと漣は、憧れも抱いていた。

漣はコレといって恋をしたことがない。

『あの人は格好良いな』だとか『優しいな』だとかそんな想いは抱いたことがあるが

それが恋だったのか？と聞かれれば、どうだろうか。

バレンタインデーとかでチョコをあげたいと思うだろうかと問われれば、

『いいえ』

と答えるだろう。

そんな淡い想いしか抱いたことのない漣にとって、  
強い恋心を抱く蒼は新鮮だった。

「うん！大好きよ。」

こう、きっぱりと人を好きだと言える蒼は、憧れだった。

「いいね。蒼ちゃん。」

「そう？…漣も恋したら解るよ。」

恋なんてできるかな。

聞きたい気持ちもあったけど、姉はその答を持ってはいないだろう  
と心の奥底にしまっ  
て漣は片づけに精を出し始めた。

その心の片隅には、さきほどの小山からのメールの存在がちらつ  
いていた…。



## 5（後書き）

間が空きましたね…。

これからこんな感じになっちゃつかと思いますが…  
よろしく願います。

蒼の部屋の掃除が終わってから1時間弱。

澪は公園に来ていた。

合コンの時にきた、あの公園…。

もうとつくに帰ってしまっているだろう。

そう思っていたのに、実際に彼の姿がないことを確認すると  
なんだか悲しくなってきた。

「そうよね。」

なんで悲しいのか、解らないまま、澪は自分に言い聞かせた。  
そう、もう居るはずがないのだ…。  
それなのに……

「あれ？白石、来たんだ。」

「…え。」

しんみりとした空気をぶち壊すように聞こえたその声は確かに小山  
のもので、  
そして振り返れば、先ほどまで澪の心を埋め尽くしていた顔があっ



た。

「…え、ってなんだよ。」

「だって、いるとは思わなかったから…。」

「なんで？なんでいないと思うの？」

「だ、だって約束の時間…過ぎてる。」

「…ああ、だってこっちが勝手に指定しちゃったわけだし。メール返ってこないしさ。」

「…ごめんなさい…。」

何時間待っていたのだろう、と考えると申し訳ない気持ちでいっぱいになって

漣は自然と頭を下げた。

「別に。来てくれたしさ。」

でも、小山は別に気にすることなく、笑っていた。

「で、なんの用なの？」

「え？…あー…うーん。」

漣からしたら、当たり前前の事を訊いたはずなのに、小山はなぜか気まずそうにする。

その態度に少しイライラするものの、あまり強くでれる立場ではない。

漣は少し拳を強く握りながら、辛抱強く小山の答を待った。

しかし、なかなか話ださない。  
待ち切れず、漣が口を開きかけたとき、やっと小山が動いた。

「…あのさ、白石って好きなやつとか、いんの？」

「…へ？」

…例えば、俺の母さんが死んじゃって…とか、そんな真剣な話を想像した漣は  
あんまり、どうでもいい質問について間の抜けた返事をしてしまう。

「…だから、付き合ってるやつとか、いるの？…って、白石聴いてる？」

「…あ、ああ、聴いてるけど。…べ、別に好きな人も付き合ってる人も居ないわよ。」

正直、知ってどうするの？  
とも訊こうと思ったのだが、その前に小山が  
「ほんとに！？」

とあんまりにも、嬉しそうな顔をしたから、訊けなかった。

「なにか、文句でも？」

どうせ、居ないわよ。  
どうせ、恋した事ないわよ。

ふいつと横を向く。

「じゃあ、俺と付き合わない？」

今度こそ、思考が飛んだ。

え……？

何？

何か、聴こえた？

「ちょっと、白石、聴いてるの？」

また、聴こえた小山の声で我に返った、そして頭の整理をする。  
違うよね。

幻聴なのよね。

さつき蒼ちゃんと話してたから、その影響なのよね。

「ごめん。聴こえなかった。」

もう一度、聴き直そう。

そしたらきつと違う言葉が聞こえるんだ。

別に、がっかりなんてしない……………

「まじかよ。じゃあ、も一回言っから、ちゃんと聴けよ？」

別に、がっかりなんて……………

「好きだ。…付き合わない？」

「……………冗談？」

「……………まじ。超真剣な話。」

そっいつて漑を見る、小山の顔は真剣そのもの。

「ありえない……………」

今まで、17年生きてきたけど、まさか自分が告白される日が来るなんて、ありえない。

ボソリと漑の口から零れた言葉を、違うふうに取りついたらしい小山がガツクリと頂垂れる。

「はあー。やっぱり駄目？…あーなんか今までフってきた女の子の気持ち解った気がする。」

なんか良く解らない、少しフワフワしたこの感情はなんだろう。

と少し夢見心地だった漑だが、なんか勘違いをしたらしい小山の言葉に、我に返る。

「え？あ、違う、違うよ。別に付き合うことがありえない訳じゃないけど…」

「…え、じゃあ、付き合ってくれんの!？」

「え、あ、う……。……。うん……。？」

付き合う、という行為がいまいち解らない澪はあいまいに答える。  
付き合うってなんだろう。

別に嫌じゃないけど……

「なんで、疑問形なわけ？」

「……だって、私はあなたのことが好きとかそういう目で見たことないし……。」

「……うわ、結構ショック。それでも結構もてる自信あるのに。」

ごめんなさい。

そう言いかけた澪の言葉を遮って、小山はでも、という

「でも、それでもいいよ。付き合ってるうちに好きになるってゆーのでも。」

「……う、うん。じゃあ、それで。」

澪が答えた瞬間、小山が飛び上がる。

「やったー！」

軽く、ガッツポーズまでしてる姿をみて、澪は  
少しドキッとしてしまった。

……もしかしたら、もう好きなのかもしれない……。……。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6267m/>

---

また明日を

2010年10月20日13時57分発行